連載「大友時代を生きた人々」

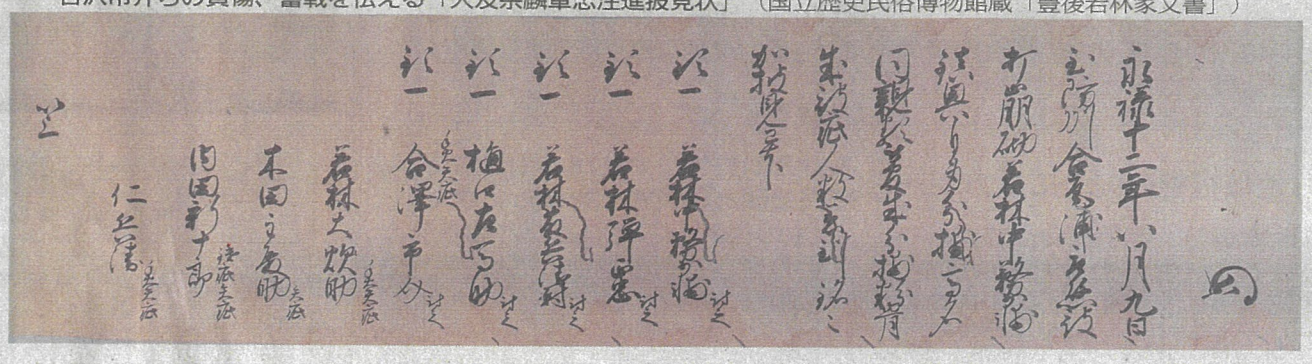
国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「合沢市介～鉄砲傷を負いながら奮戦～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2023年4月28日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

合沢市介らの負傷、奮戦を伝える「大友宗麟軍忠注進披見状」（国立歴史民俗博物館蔵「豊後若林家文書」）



合沢市介　鉄砲傷を負いながら奮戦

永禄11（1568）年、中国地方の毛利元就と合戦中の大友義鎮（宗麟）は、大内輝弘を周防の合尾浦（秋穂浦のことで現山口県山口市）に上陸させて、北部九州に出陣中の毛利軍の裏をかく作戦を考案します。

この海上戦略では、豊後から周防灘を横断して合尾浦に上陸する大友水軍の大将に、若林鎮興が任じられました。翌永禄12（69）年8月、合尾浦に上陸した大友水軍は、迎え討つ毛利軍と壮絶な戦いを繰り広げました。若林家に残る古文書群によると、大将の若林鎮興と若林弾正忠、若林藤兵衛尉、樋口左馬助の4人はそれぞれ敵1人を討ち取ったものの、味方にも多くの負傷者が出ました。木田主殿助は「矢疵」（敵が放った矢による負傷）、若林大炊助は「手火矢疵」（鉄砲による負傷）、内田新十郎は「鑓疵矢疵」（敵のやりと矢による二重の負傷）を負っています。

そんな中、合沢市介については、「手火矢疵」を被りながらも「頸一」（敵の首一つ）を討ち取ったことが、記録されています。

この合沢市介の武勇については、11年後の天正8（80）年の史料でも確認できます。この年の8月20日、今度は毛利水軍の「兵船」が豊後国国東半島の安岐（現国東市安岐町）に攻めて来ました。大友方は、再び若林鎮興らを中心に防戦し、逆に退却する敵船を追って周防の室冨（室積のことで現山口県光市室積）まで攻め上り、2日後の22日に「敵船一艘」を捕らえています。わずか2～3日で周防灘を往復する毛利・大友両水軍船団の緊迫した戦況が伝わってきます。

そしてこの時にも、味方4人が負傷しますが、一方で若林鎮興、若林因幡守、若林九郎兵衛尉、幸野勘介、丸尾野新五兵衛尉、そして合沢市介の6人が、それぞれに頸一を討ち取っています。

戦国時代は、地域の大名たちが武力で覇権を競い合った時代です。この大名同士の合戦は、陸地のみならず、兵船や「警固船」を使って海上でも行われました。残存する古文書群からは、双方の大名が、合戦での家臣たちの「警固船馳走」を褒賞するとともに、今後も合戦に備えて「船誘」（船の建造）を行うよう命じたことも分かります。

加えて、合沢市介の手火矢疵の記録のように、矢、やり、手火矢といった当時の海上合戦で使われた武器の実態も明らかとなります。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝